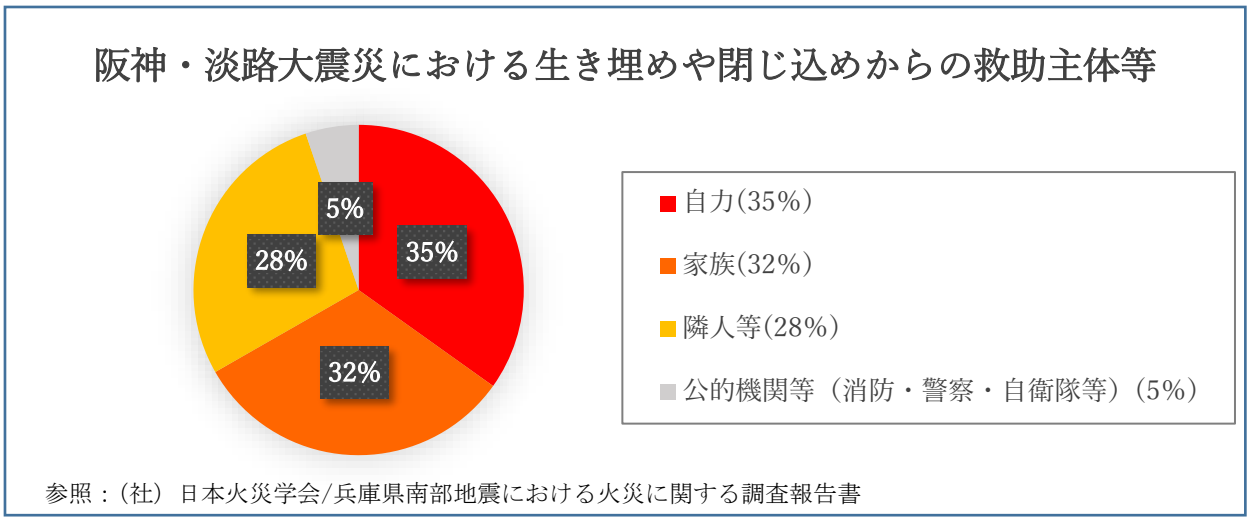
救助活動要領

1　共助による救助活動の考え方（住民等による救助活動の必要性）

大規模災害が発生した場合、消防・警察・自衛隊等の公的な専門機関が現場に入るまでには時間がかかることが予想されます。

震災により発生した倒壊建物からの閉じ込め等に、震災初期に近隣住民等よって対応することで生存率が上がります。



2　エンジンカッターを活用した救助活動

倒壊した建物からの救出にエンジンカッターを用いる場合は、主に屋根等を切断し、垂直方向に救出口を作る際に使用します。

ただし、操作中にエンジンカッターの刃が金属に接触すると、火花が発生するため、活動場所付近に危険物（ガス、ガソリン等）が流出している状況では使用できません。

【エンジンカッター】

【金属を切断している様子】

Point

●家の中のどこに要救助者がいるのか確認しましょう。
●周囲に危険物（ガス、ガソリン等）が流出していないか目や鼻で確認しましょう。
●必ずヘルメット、手袋、ゴーグルを着装しましょう。

３　油圧ジャッキを活用した救助活動

【スプレッドラム　拡張能力　１t】

【ラムシリンダー　拡張能力　２t】

【ガレージジャッキ　持上能力 1.5t】

①　持ち上げる物の状態を確認する
　要救助者の位置、ジャッキを設置する位置、ジャッキアップしたことにより状況が悪化しないか等を確認する。

②　あて木等を隙間に差し込む
　要救助者が現在の状況よりさらに潰されることがないよう配意する。

③　ジャッキを設置し、重量物を持ち上げる
　ジャッキで重量物を持ち上げた分、空いたスペースにあて木等を追加（上重ね）して、より広い空間を保持する。

④　要救助者を救出する
　要救助者を引き出せるような空間を確保することが出来たら引っ張り出す。手が届かない又は、十分なスペースがない場合は無理をせず、空間を保持した状態で消防や警察の到着を待つ。

Point

●あて木となるものをなるべく多く確保しましょう（ジャッキ単体での救助活動は行わず、「あて木」等を併用して安定した状態を維持しながら活動することが望ましいです）。

●ジャッキを設置する隙間がない場合は、バール等を活用し設置する隙間を作りましょう。

●「点」でジャッキアップするより「面」でジャッキアップする方法が望ましいです。

「点」で力を加えた場合、バランスが不安定になりやすいほか、力が一点に集中するため重量物が破損することが考えられます。

あて木等を活用し、「面」で支えることで力が分散し、安定感が増します。

※重量物の実際の重さを現場で判断することは困難です。活動中、ジャッキに異常が出た場合（操作ハンドルが異常に固い・重たい、油が滲みだす等）は、ジャッキの能力（許容荷重）を超えてしまっている場合があります。その時点でジャッキの操作を中止し、要救助者が潰されないような空間を維持・確保する活動に切り替えましょう（すき間にあて木等を入れるなど）。